

「学習内容の明確化・構造化を目指した授業の創造」

小田切 聡・飯塚 誠吾・川久保 愛

1 主題設定の理由

本校の保健体育科では、平成19年度から「学習内容の明確化」を目標に研究を進めてきた。本年度は、これまで課題となっていた体育の目的の具体的内容（すべての子どもたちが身につけるべきもの）「技能≒身体能力」「態度」「知識、思考・判断」を身に付けさせ、一定の「経験」をさせることや、新学習指導要領で謳われている指導内容と照らし合わせてみて、本校でまとめている「学習内容」が妥当であるかどうかを検証しながら、追加や修正・訂正をしていく必要があると考えている。また、すべての領域について学習内容を明確化し、それらを整理して構造化する必要があると考え、研究テーマを設定した。※注：本校保健体育科が目指す構造化とは、学習内容の体系化【基礎的・基本的な内容のつながり（広がり）≒横軸の関連性】と系統化【応用的な内容のつながり（深まり）≒縦軸の関連性】を両面からとらえて示すものとする。

また、新学習指導要領が公示され、本校でも平成24年完全実施に向けて移行措置に取り組んでいる。平成24年度には時間数が105時間に増加し、学習内容においても1・2年生を通じて選択であった「武道」「ダンス」を含めて、すべての内容を必修とすること、3年生では、「体づくり運動」「体育理論」を除き、選択とすること、「球技」について「ゴール型」「ネット型」「ベースボール型」として類型で規定すること、となった。さらに、発達段階においても小学校・中学校・高等学校において、より一層の連携が図られるよう小学1～4年生、小学5年生～中学2年生、中学3年生～高校3年生といった4年間を1つの枠とした考え方も示された。これにより、中学校では小学校との連携及び高等学校との連携を視野に入れた指導が求められる。そこで本校では、附属小中学校の連携を深めながら「学習内容の明確化・構造化」を研究テーマにし、研究を進めていきたいと考えている。

2 研究の目的

中央教育審議会答申では、保健体育科の課題として、①運動する子どもとそうでない子どもの二極化傾向にある。②子どもの体力低下傾向が依然深刻である。③生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の育成が十分に図られていない例も見られる。④学習体験のないまま領域を選択していることが見られる。ということが示された。本校の現状を見てみると、特に①・②についてその傾向がある。①については、休み時間や学校外の時間に、外で遊んだり地域の行事（子供クラブの球技大会など）に参加したりするなど、運動や体を動かす時間の生徒の割合が少ないのもその原因の一つと考えられる。②については、昨年度の体力テストの結果から、「反復横とび」「ハンドボール投げ」「持久走」の3種目で全国平均を下回るデータが見られる。

新学習指導要領の目標の中に「運動を適切に行うことによって、体力を高め心身の調和的発達を図る」「運動における競争や協同の経験を通して、公正に取り組む、互いに協力する、自己の役割を果たすなどの意欲を育てるとともに、健康・安全に留意し自己の最善を尽くして運動をする態度を育てる」ということが明記されている。このことから、保健体育科では「学習内容の構造化」を図り、生徒一人一人に運動や健康・安全についての理解と運動の合理的実践を通して、生涯にわたって運動に親しむ資質や能力を育てるとともに健康の保持増進のための実践力の育成と体力向上を図り、明るく豊かな生活を営む態度を育てることを目標に、様々な動きを身に付ける時期、多くの領域を体験する時期、卒業後に少なくとも一つの運動やスポーツを継続することができるようにする時期を考慮し学習内容の構造化を図っていくことを目的とする。また、学習内容の構造化に伴い「指導と評価の一体化」も今後行っていく。

これらのことを受け、保健体育科では次のような生徒像を目指し、研究実践を行うこととする。

保健体育科として目指す生徒像

- 運動やスポーツに親しむことができる生徒
- 探求心を持って誠実に学ぶことができる生徒
- 運動の楽しさやできる喜びを実感することができる生徒
- 互いの良さを認め、豊かなかかわりが体験できる生徒

3 全体研究とのかかわり

全体研究では、『知の再構成を目指して～「かかわり」を生かした学習過程の工夫～』をテーマに3年計画の2年次をむかえ、昨年度同様研究のポイントとして以下のように設定した。

- ・「かかわり」を見出す活動
- ・学んだことを伝える活動
- ・自らの学びを見取る評価

これらを各教科の目標やねらいと生徒の実態に組み合わせることで、学習内容の「かかわり」を意識できると考えている。

そこで保健体育科では、次のようにとらえて全体研究と関わりを持たせていきたいと考えた。

①「かかわり」を見出す課題・活動の設定

毎時間の授業において、核（コア）となる学習内容を明確にする。例えば、バスケットボールの「スペースの活用」を学習する授業では、『空間を認識し、空いている場所を見つけ出し移動すること』が学習の中心となるが、それを学ぶには「相手ディフェンスの確認」「タイミング」「スピード」「フェイク」などの様々な要素が関連してくる。そこで、それらの要素を加味した簡易ゲーム（ルールや場所、用具などを考慮）を取り入れることで、学習内容の「かかわり」を見出す活動を行っていききたい。

②学んだことを伝える活動

単元や種目に合わせた学習カードを作成し、授業のポイントだけでなく、学んだこと、発見したこと、悩んだこと、つまづいたことなどより具体的に書かせることで、1時間の学習で身につけたものを表現できるようにしていきたい。さらに昨年度の課題を踏まえて、「共に活動する仲間に指示やアドバイスができる場面」や「コミュニケーションを通して新たな視点に気付く場面」をつくっていききたいと考えている。

例えば、柔道の連絡技で上手に技をかけることができる生徒や、バレーボールでサーブカットが上手にできる生徒が、同じグループの生徒に「発見したこと」「注意したこと」などを説明（解説）することで、自分が学び取ったことを深めたり、広げたりすることができると考えている。その他にも、生徒から出された「こつ」や「タイミング」に関わる言葉を共有したり、体の部位や空間を指さして指摘したりすることも有効であると考えている。お互いに意見（情報）交換をすることによっても、技の習得がより確実なものになったり、技能をより向上させたりすることができると考えている。また、この活動をより効果的に行うためには、教師がポイントとなる視点をきちんと与え、種目ごとの基本用語や分かりやすい言葉で説明ができるように助言する必要があるので、その点にも十分配慮した授業づくりを行っていききたいと考えている。

③学びを見取る活動

学習カードに1時間ごとに学習の成果や課題をより具体的に記述することで、これまでの学習の振り返り（変容や成長の度合い）が確認できるようにしていきたい。また、各授業の後半でゲーム的な要素を取り入れることで、「学んだことを生かした動きや技ができているか」や「既習のものから選んだり、複数の要素を合わせたりしているか」などを評価につなげていきたいと考えている。さらに、上記②の内容については、「ポイントとなる内容を理解した説明や発言をしているか」「様々な角度から捉えているか」「説明が分かりやすいか（伝わっているか）」などを評価したり指摘したりできるような活動を取り入れ、学びの様子が見取れるようにしていきたいと考えている。

4 今年度の研究内容と課題

昨年度の公開研究会では、武道の柔道に焦点を当て、学習内容の明確化およびそれに伴う評価規準の作成を行った。新学習指導要領が提示され、指導すべき内容が具体的に示されたことを受け、本校でも教えるべき内容（学習内容）を精選して授業を行った。授業後の分科会では、まず、本校の研究テーマの柱となる『かかわり』に関連する活動について多くの意見が交わされた。「学んだことを伝える活動」について、生徒同士で技能に関わるアドバイスや解説をしたり、意見交換ができたような場面を学習内容に応じて設定していく必要があるとのご意見を頂いた。また、生徒の実態に応じた技（技術）を取り扱うことも学習内容を習得させる上で大事なポイントであるのご意見も頂いた。

そこで本校保健体育科は、今年度も「技能」という観点に焦点を当てながら『学習指導内容・計画の見直し、それを整理して構造化する』一方で、本校の研究テーマの「かかわり」に関連する活動についても研究を進めていきたいと考えている。

さらに、小中の連携についても教師が交流できる機会を増やし、他の小中学校に発信できるような取り組みを行っていききたいと考えている。具体的には以下の3点を挙げてみた。

①『基礎的・基本的な技能』、『応用的な（既習の内容を変化させる、相手や状況に合わせて使うなど）技能』の学習内容の構造化を行う。

『基礎的・基本的な技能』について、その種目（運動）のメカニズムから、「基礎・基本」となる運動の内容を洗い出し、その運動の本質的な内容（より良く体を動かすための体の使い方や各々の技能の基となる体の動き）の精選を行う。「応用的な技能」については、「基礎的・基本的な技能」に基づいて、より高度な試合（ゲーム）を行うために必要とされる技能を洗い出し、精選を行う。【「態度」「学び方」との関連性も持たせる】

②『種目の特性と技能』のかかわりを明確にする。

集団の実態に合わせたルールのコ案や簡易ゲームの適用、場の工夫、各個人の技能や関心を生かした戦術、相手の実態に応じた作戦など、これまでに習得した技能を状況に応じて活用できるように、その種目の特性や技術同士との関連性（かかわり）を意識させることで、知の再構成を目指していきたい。さらに、仲間同士で技術の解説やアドバイスができるような場面の設定をしていきたい。

③ 小・中の連携を図る。

本校は、附属小学校から入学してくる生徒が4分の3を占めているため、小学校との連携を図り、小学校での発達段階に応じた運動技能を確認できれば、中学校で教えるべき学習内容がより明確になり、学習効果が一層高まると考えた。今年度はこれまでの情報交換や授業観察だけでなく、ゲストティーチャーとして附属小の授業を行うなど、より連携を図っていききたい。

5 研究計画

○1年次・・・学習内容の明確化・構造化

○2年次・・・学習内容の明確化・構造化＋「学んだことを伝える活動」「学びを見取る活動」に関わる研究

○3年次・・・研究の検証とまとめ

① 本校の保健体育科でどのような特色を盛り込んでいくのかを考えながら、第1・2学年の必修教科について年間の指導計画を作成する。また、第3学年における選択制授業について選択する領域での種目の検討及び年間の指導計画の作成を行う。

② 年間指導計画に位置づけられた各教材同士のつながりと生徒の発達段階を意識しての「運動・技能の内容」を中心に構造化を図る。

③ 構造化した学習内容をつながりや関連性、特に指導の重点や特色が明確になるような整理方法の工夫を行う。

④ 指導と評価の一体化を目指した学習内容に対する評価規準の見直しを行う。

この際、特に②の段階で生徒がその教材の特性に触れ、楽しさや喜びを感じ、後の実践につながって欲しいという願いを基本とした「学習内容の重点化（特色を出す指導）」を考えられるように心がけたい。

6 今年度の研究の成果と課題

本校保健体育科は、昨年度から「技能」という観点に焦点を当てながら『学習指導内容を見直し、より精選・整理して改善する』ことで、学習内容をより明確にした授業づくりができると考えて研究を進めてきた。そこで、今年度は昨年度考えた3つの柱を中心に研究をより深化させ、学習内容をより明確にすることで、全体研究で謳われている「かかわり」とも深く結びついた研究ができると考え、今日まで研究を進めてきた。

まず、『毎時間の授業において核（コア）となる学習内容を明確にすること』だが、今回の公開研究会では水泳を行い、「仰向けになって浮くこと」に関わる内容に焦点を当てて授業を行った。今回の研究討議では、新学習指導要領の内容に関わって、1時間の授業の中でどの部分に絞って学習内容を明確にしたのかが主に議論された。仰向けで浮く場合「姿勢」が重要になるが、その中でも「腰がくの字に曲がらないように背中を伸ばして浮く」ことが挙げられた。これはこの授業での核となる学習内容であり、生徒に気付かせたい「かかわり」の重要ポイントだと強く感じる事ができた。今回、浮きやすい姿勢について授業の初めに教師側から提示したが、単に要点を押さえた指導を行うのではなく、生徒への問いかけの中で、まずは「生徒自らがこれまでの経験を生かした様々な体験を試みる」ということが重要であることを強く感じた。今回初めて背泳ぎに触れる生徒も多いが、小学校で学習して

きた内容（簡単な浮き沈みやクロール、平泳ぎなど）を参考にしたり利用したりすることで、既習内容との「かわり」に気付かせることにつながると感じた。また、“楽に浮く”ことを考えさせることで、「腰を曲げずに背中を伸ばすこと」だけでなく、「全身の力を抜くこと」や「頭の向き（あごの位置）」など、他の様々な要素も重要であることに気付かせることができると感じた。明確な学習課題を提示すると共に、試行錯誤する時間を確保することも重要であるので、修正して授業づくりを行っていききたい。さらに、学習内容が多すぎたことも課題として挙げられたので、欲張りすぎず内容を絞り込んでいくことも考えたい。このことは他の単元・種目でも活用ができるので、今後の研究に生かしていきたい。

次に、『伝える活動（≒言語活動）』については、昨年度まで行ってきた学習ノート（授業で学んだことや悩んだことなど）への記入だけではなく、「コツ」や「ポイント」を押さえた適切なアドバイスやコーチングによって、技術や情報の共有化することが大切であると考え実践してきた。単なる言葉かけではなく、教師側がしっかりとした視点を与えた上で課題を提示することが重要であり、それが本時の学習と既習の学習がつながり、かわりを見いだせるキーワードにもなると感じた。今回の水泳の授業では、ほとんどの生徒が積極的にコミュニケーションをとりながら練習に熱心に取り組んでおり、中には1つ1つ丁寧にアドバイスする場面も見られた。しかし、中には学習内容が多く、アドバイスするコツやポイントを理解しきれない生徒もいたので、内容や視点を1つか2つに絞ることで、当を得たアドバイスやコーチングができると感じた。このことは他種目での指導にもいえることなので、今後改善していきたい。

最後に、『学びを見取る活動』については、全体研究とのかかわりで述べたように、各授業の後半でゲーム的な要素を積極的に取り入れ、単に技術の習得状況を見るのではなく、「学んだことを生かした動きができているか」「既習のものから選んだりしているか」などを評価することで、要点を理解した学習ができているかを確認することにもつなげることができた。また、作戦タイムや意見交換の場を意図的に設けることで、「ポイントとなる内容を理解した説明や発言をしているか」「説明が分かりやすいか」などが見取れるような授業づくりに努めた。その結果、コメントの内容だけでなく、徐々に質の高いゲームの様相が見られるようになってきたので、研究の成果をあげることができた。

今後の課題は、主に小中の連携である。今年度は年度当初から附属小学校の協力を得て行っていく計画であったが、学校行事や時間割の関係から、情報交換や授業観察にとどまってしまう、ゲストティーチャーなどの形で直接指導を行うことができなかった。今後も可能な限り実践できるような調整を行っていききたい。

《参考文献》

「中学校新学習指導要領保健体育科」文部科学省

「指導と評価－学校の学力と社会で生きる力－（高橋健夫）」平成14年日本図書文化協会

「健やかな体を育む教育の在り方に関する専門部会これまでの審議の状況」平成20年中央教育審議会

第1学年1組 保健体育科 学習指導案

山梨大学教育人間科学部附属中学校
指 導 者 飯 塚 誠 吾

1. 単元名 「水泳」
2. 運動の特性について（省略，HPをご覧ください）
3. 生徒の実態（事前アンケート結果のみ掲載，その他はHPをご覧ください）

水泳に関する事前アンケート

1	体育は好きですか？	A好き・Bどちらかといえば好き・Cどちらかといえば嫌い・D嫌い
2	水泳は好きですか？	A好き・Bどちらかといえば好き・Cどちらかといえば嫌い・D嫌い
3	水泳は得意ですか？	A得意・Bどちらかといえば得意・Cどちらかといえば不得意・D不得意
4	小学校6年生までに背泳ぎができましたか？	Aできた（25m以上）・B少しできた（25m未満）・C全くできない・Dやったことがない
5	ペットボトルやビート板を使って仰向きで浮くことができますか？	A以前からできる・Dできないまたは経験がない
6	何も使わずに仰向きで浮くことができますか？	A以前からできる・Dできないまたは経験がない

水泳に関する事前アンケートの集計結果

問	A				B				C				D				合計		
	男	女	合計	割合	男	女	合計	割合	男	女	合計	割合	男	女	合計	割合	男	女	合計
1	60	45	105	66.0%	17	23	40	25.2%	2	10	12	7.5%	0	2	2	1.3%	79	80	159
2	33	30	63	39.6%	30	22	52	32.7%	12	19	31	19.5%	4	9	13	8.2%	79	80	159
3	13	12	25	15.7%	31	21	52	32.7%	23	29	52	32.7%	12	18	30	18.9%	79	80	159
4	44	30	74	46.5%	20	27	47	30.2%	6	10	16	10.1%	9	12	21	13.2%	79	80	159
5	56	48	104	65.4%									23	32	55	34.6%	79	80	159
6	44	41	85	53.5%									35	39	74	46.5%	79	80	159

4. 授業の構想，教師の指導観

本校では第1・2学年において全ての領域を単級（第2学年の柔道・ダンスは男女別）の男女共習で行っており、「水泳」の取り扱いについては、第1学年のみ履修する計画となっている。そのため、3年次の選択制授業において「水泳」を履修しなければ1年次のみ経験で終わってしまう可能性があり、1年次に背泳ぎを取り入れ、第3学年の「複数の泳法で泳ぐ」という目標に近づけるようにしたい。

また、本校のプールは小学校と共用しているため、多いときには4クラス（1クラス1～2コース）、少ないときでも2クラス（1クラス3コース）はプールを使用するため施設の面でも厳しい状況にあり、計画的に水泳指導を行う必要がある。個人の技能を伸ばす意味でも早い時期に「背泳ぎ」を取り入れ3年次につなげていきたいと考えている。

5. 単元目標 6. 評価基準 7. 指導計画 は省略（HPをご覧ください）

8. 本時の授業

- (1) 日時 平成21年7月4日（土） 9:40～10:30（50分間）
- (2) 場所 山梨大学教育人間科学部附属小中学校共用プール

(3) 対象 1年1組 (男子20名 女子20名 合計40名)

(4) 題材 水泳 (全10時間計画の4時間目)

(5) ねらい

○水中で手を持つなど仲間の学習を補助したり、泳法の行い方などの学習課題の解決に向けて仲間に助言したりしようとする事ができる。

○背泳ぎで、キックとストローク動作のポイントを身に付けることができる。

(6) 本時の展開

時間	学習内容及び学習活動	指導・支援と評価
はじめ 10分	<ul style="list-style-type: none"> ○水着に着替え、用具を準備する。 ○バディを確認し、ウォーミングアップを行う。 <ul style="list-style-type: none"> ・準備運動、入水準備、水慣れ(体に水をかける、腰掛けバタ足、水中に潜りバディの股をくぐる3回、ストリームライン姿勢でのスタート練習(バディで距離を競う2回) ○挨拶 ○本時の学習内容を確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○素早く着替えるよう促す。 ○バディを確認し、準備運動、シャワー、水慣れを行うよう促す。 ○安全面から、ウォーミングアップを丁寧に行うよう指導する。同時に体調等健康観察を行う。 ○水慣れについて、安全面や生徒に意識させたいポイントを指導する。 ○落ち着いた雰囲気の中で挨拶ができるよう促す。 ○前時の反省を生かしながら、目標・課題を持って取り組めるよう指導する。
	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 0 auto;"> <p>○背泳ぎで続けて長く泳ぐためには、キックは腰が「く」の字に曲がらないように水平に浮いた状態で行い、ストロークは、水中では肘が肩の横で曲がるようにしてかき、その後、手・肘を高く伸ばした直線的なりカバリーの動きをすること。</p> </div>	
展開 15分	<ul style="list-style-type: none"> ○前時の復習(クロール・平泳ぎの確認)・クロール、平泳ぎを、プールサイドからサイドへ各2本 	<ul style="list-style-type: none"> ○プルやキック、呼吸のバランスをコンビネーション良く泳ぐよう指導する。
展開Ⅱ 30分	<ul style="list-style-type: none"> ○背泳ぎの部分練習(2人組) ※1本ずつアドバイスをする。 <ul style="list-style-type: none"> ・頭を持ってもらっての浮き進み。 ・ビート板を使っての仰向け浮き。 ・ビート板を使ってのバタ足。 ・ペットボトルを使っての仰向け浮き。 ・ペットボトルをもち、頭を持ってもらっての浮き進み。 ・足を持ってもらってスカリング練習。 ・頭を持って引いてもらってのバタ足。 ・手を伸ばし、引いてもらっての浮き進み ・手を伸ばし、引いてもらってのバタ足。 ・手を伸ばし、引いてもらって片手ずつかいてのバタ足。 ・一人でのコンビネーション練習。 (最初は肘を曲げた状態からリカバリーを行い、徐々に肘を伸ばし、より遠くの水をキャッチする) 	<ul style="list-style-type: none"> ○仰向けの姿勢で浮くコツをつかむよう指導する。 ○お互いにアドバイスをし合いながら練習するよう促す。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>お互いにアドバイスしながら、相手の良い点・悪い点を指摘することができる。</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> ・視線は斜め上を向くように引いている生徒に手を出しポイントを示すよう指導する。 ・徐々に補助器具を小さくし、最終的には補助器具を使用しないで浮くように促す。 ・両手を頭上で組んで、腰が「く」の字に曲がらないように背中を伸ばし、水平に浮いてキックをするよう指導する。 ・水中では、肘が肩の横で60～90度程度曲がるようにしてかくよう指導する。 ・空中では、手・肘を高く伸ばした直線的なりカバリーの動きをするよう指導する。 ・呼吸は、プルとキックの動作に合わせて行うよう指導する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>背泳ぎの基本的な技能のポイント(こつ)を身に付けている。(ストロークやキックが安定してできる)</p> </div>
まとめ 5分	<ul style="list-style-type: none"> ○本時の反省を発表する。 ○本時のまとめをして、次時の学習内容を知る。 	<ul style="list-style-type: none"> ○成果と反省を要点を絞って発表できるように指導する。 ○授業を振り返っての評価と次時の確認を行う。

① 公開研究会「水泳」の授業について

ほとんどの生徒が仰向け姿勢（背泳ぎ）で浮く・泳ぐのが初めてということもあり、水泳で大切な「浮力」「水の圧力」「抵抗力」のかかわりを再認識し、「推進力」を得ることを実感できる良い機会になると考え、学習内容の明確化・構造化を視野に入れ、学習計画及び学習内容を立案した。水泳の技能習得に大切な「推進力」を得るための指導として、「リラックスして姿勢で浮く」ことから始まり、最終的には「水の中でできるだけ長く力強く（+効率よく）水をかく」という段階的指導を行った。

② 今回の水泳の授業と全体研究とのかかわりの一例として

- ・「かかわり」を見出す活動
泳ぐために重要な要素「浮力」「水の圧力」「抵抗力」のかかわり→推進力
各教科とのかかわりとして、スカリング技術→合力（理科）
- ・学んだことを伝える活動
ボディシステム（ペア学習）を通して、アドバイスし合う活動
学習カードのボディ確認欄を通して、技能の段階的習得の確認活動
- ・自らの学びを見取る活動
ボディからのアドバイスを受け、技能の習得段階・習得状況の確認
学習カードから、技能習得の振り返り・プロセス確認

③ 本時の授業の反省（生徒の個人カードから）

- ・背泳ぎが順序立てて練習できて良かった。段階ごとに練習しコツをつかむことができた。
- ・ペットボトルを使うと沈まなかったが、使わずに泳ぐと沈んでしまうので次は沈まないことを目標に頑張りたい。
- ・ストローク時にまだ遠くへのイメージがつかめていないので、しっかりと手を遠くにという意識を持つようにしたい。
- ・ボディのアドバイスを聞き、「確かにそうだな」とアドバイスを素直に聞いた。
- ・背泳ぎの時に腰が落ちてしまうので、次は腰に気をつけたい。
- ・ボディに「ここが良かった」とアドバイスしてもらったので、私もアドバイスをすることができました。ボディとコミュニケーションをとりながら、良いところや悪いところを学ぶことができた。
- ・背泳ぎを部分的に練習して少し泳げるようになった。特に手のかきを頑張りたい。
- ・ボディに手伝ってもらい背泳ぎの基本を覚えることができた。
- ・初めて仰向けで泳いだのが難しかった。手を意識しながら練習に取り組んだ。

水泳に関するアンケート

1	体育は好きですか？ A好き・Bどちらかといえば好き・Cどちらかといえば嫌い・D嫌い
2	水泳は好きですか？ A好き・Bどちらかといえば好き・Cどちらかといえば嫌い・D嫌い
3	ペットボトルやビート板を使って仰向きで浮くことができましたか？ A以前からできた・B簡単にできた・C少しできた（5～15m程度）・Dできない
4	何も使わずに仰向きで浮くことができましたか？ A以前からできた・B簡単にできた・C少しできた（5～15m程度）・Dできない
5	仰向けでスカリングをしながら浮くことができましたか？ A以前からできた・B簡単にできた・C少しできた（5～15m程度）・Dできない
6	水泳の授業を受けて、背泳ぎ（腕や脚が曲がっていてもOK）ができましたか？ A以前からできた・Bスムーズにできた・C少しできた（5～15m程度）・Dできない
7	授業で背泳ぎを行ってみたいの感想を簡単に書いて下さい

水泳に関するアンケートの集計結果

問	A				B				C				D				合計		
	男	女	合計	割合	男	女	合計	割合	男	女	合計	割合	男	女	合計	割合	男	女	合計
1	51	34	85	54.1%	23	27	50	31.8%	5	11	16	10.2%	0	6	6	3.8%	79	78	157
2	31	22	53	33.8%	27	26	53	33.8%	14	21	35	22.3%	7	9	16	10.2%	79	78	157
3	56	47	103	65.6%	9	13	22	14.0%	12	15	27	17.2%	2	3	5	3.2%	79	78	157
4	44	40	85	53.5%	10	8	18	11.5%	19	23	42	26.8%	6	7	13	8.3%	79	78	157
5	35	28	63	40.1%	10	6	16	10.2%	21	27	48	30.6%	13	17	30	19.1%	79	78	157
6	45	31	76	48.4%	7	13	20	12.7%	19	19	38	24.2%	8	15	23	14.6%	79	78	157
7	<p>事前アンケートの4番で、C（全くできない）とD（やったことがない）の生徒を感想から、成果や課題をそれぞれ挙げてみた。</p> <p>【成果】 ・練習してみると結構楽しかった。 ・25m足をつかずに泳げるようになった。 ・道具を使うことで練習するうちに少しできるようになった。 ・少し長く泳げるようになりたい。 ・速く泳げるようになりたい。 ・もっと上手になりたいと思った。 ・上手くできなかったけど楽しかった。 ・脚を動かすと沈んでしまったのもっと練習をしたかった。 ・浮くことに恐怖心がなくなって良かった。 ・練習をしたら浮けるようになった。 ・浮くのは難しいけど、道具を使ったらできた。 ・あまりできなかったけど、しっかり泳げるようになりたいと思った。 ・1回もやったことがなかったけど、少し泳げて良かった。 ・クロールや平泳ぎと違って簡単にできた。</p> <p>【課題】 ・背泳ぎくらいはできるようになろうと思ったがあまりできなかった。 ・息が楽にできるのはよいが、水が耳に入ってしまう少し難しいと思った。 ・浮くことが難しかった。 ・腰が少し曲がると浮けなくなるので難しかった。 ・腕を回す（ローリング）ときに、水が顔に来るので息つぎをするタイミングが難しい。 ・体を長い時間浮かせるのが難しかった。 ・スカリングで少しは浮くが、だんだん沈んでしまう。 ・少ししか習っていないので、上手く泳げなかった。 ・クロールよりも難しいと思った。 ・一生懸命脚を動かしてもどんどん沈んでしまい大変だった。息つぎができずに戸惑った。 ・最初はみんなと同じペースでできたが、徐々に差が出てしまった。 ・やろうという意識はあったが結果がついてこなかった。 ・水が怖いので身を任せて浮くことができなかった。 ・浮くことはできても、手を動かすと難しく沈んでしまうことが多かった。 ・泳いでいるうちに曲がってしまったのでまっすぐ泳ぐ練習をもっとしたい。 ・曲がってしまうのを修正したい。 ・脚を動かすと沈んでしまったのもっと練習がしたい。</p>																		

まとめ

新学習指導要領の完全実施を見据えて、今年度から新たに背泳ぎに取り組んだ。初めて1年生で背泳ぎを扱うということでとまどいもあったが、「仰向けで浮く」ことを学習内容の中心に据えることで、生徒が何を身につけるのが明確になったと思う。その中で、ペットボトルやビート板などを使って仰向きで浮くことができるようになった生徒（B・C）が49人（31.2%）増え、また何も使わずに泳げるようになった生徒（B・C）も60人（38.3%）増えるなど、指導の成果が見られる結果となった。しかし、学習計画では基本を学習する時間が1時間しかなく、課題別練習の時間を含めても最大5時間しかないので、背泳ぎの基礎的・基本的な内容が押さえきれないという課題も生徒の感想から見えてきた。今後は、学習内容の改善だけでなく指導計画の見直しも考えていきたい。